

学長賞 自由部門：「笑顔が教えてくれたこと」

英語英米文学科 1 年 2 組 島村由芽

「幸せとは何か。」

日本で生まれ育ち、物質的な豊かさで溢れた環境で生活している私たちは、この問いに対して明確に答えられるだろうか。

私は、高校 2 年生でフィリピン・マニラの郊外ケソン市に位置するパヤタスというスラム街を訪れた際に、その答えへの手がかりを得た。

パヤタスには、かつてスモークーマウンテンと呼ばれるゴミ山が存在していた。今でもその周辺に人々は暮らしており、苦しい生活環境の中で毎日ゴミ山に出かけては生活の糧を探し得ている。

スラム街の道路を挟んだ向かい側には私立高校があり、敷地は広く、背の高い門の外には警備員が常駐し、生徒たちは制服を着て頑丈な建物の中で勉強していた。しかし、私がスラム街に足を踏み入れた瞬間、悪臭が漂い、子供たちはボロボロの服を着てサンダルや裸足で整備されていない道を歩いていた。住まいの造りは簡素でほとんどの家にドアがなく、今にも壊れそうであった。たった一本の道路を境に生活はまるで正反対である。そこで日本での生活とは全く異なる現実を知り、衝撃を受けた。

私がパヤタスを訪れて最も驚いたのは、そこに暮らす人々の笑顔が輝いていたことであった。そこでの生活は想像を超える不便さで、大変なことは数え切れないほどあるだろう。しかし、私たちが行く先々で出会う子供たちはどこに行っても楽しそうに遊び、近所の人たちはお互いに協力しあって生活していた。訪れた私たちにもそこでの生活について何でも答えてくれ、優しく接してくれた。

いくつかの家庭を訪れ、話を聞かせてもらったが、目で見てわかること以上に生活は大変だということが伝わってきた。子供から高齢の人までがゴミ山でお金に換えられそうなものを探し出し、道路脇に屋台を構え、そのまま使えそうなものや修理して使えそうなものを売ったり、食べ物を売ったりして生活している。五畳ほどの狭いバラック小屋に六、七人で暮らしているが、決して頑丈ではないため、雨季には浸水することもあるそうだ。ライフラインが整っているとは到底言えず、日本国憲法が示すところの最低限度の生活もままならない人はたくさんいた。スラム街の中を歩いて回り、このような劣悪な環境で生活しているなんてかわいそうだと率直に思った。しかし、どの家庭で話を聞いてもみな笑顔で「幸せだ」と言うのだ。家族で仲良く暮らし、子供たちが笑顔でいてくれるだけで幸せだと。その言葉を聞き、私は自分の考えを反省した。「幸せ」とは物質的な豊かさに限らない。確かに、彼らが安定した生活を手に入れることほど嬉しいことはない。しかし、彼らの考える「幸せ」とは、自分が置かれた環境の中でいかに心を満たし、どんなに小さなことでも価値を見出すことができるかによって決まるのではないかと、そこで気づきを得た。

パヤタスで得た学びや経験から、私は今までの生活を振り返った。電気もガスも水道もあって当たり前のように生活していなかっただろうか。あれも欲しい、これも欲しいと欲望ばかり言ってはいなかっただろうか。私は、物質的な豊かさを追求するうちにいつのまにか目の前の小さな幸せに鈍感になり、見落としてしまっていたのである。安全な水が手に入らない地域に住む人々にとっては、蛇口を捻れば清潔な飲み水が出てくるのも幸せなことである。戦争や紛争が長く続いている国の人々にとっては、攻撃に怯えることなく安心して眠ることができるのも幸せなことである。このように、自分にとっての「当たり前」が誰かにとっては「贅沢」かもしれない。だからこそ、目の前の小さな幸せを見落とさないために、日々の生活を見直し、自分が生活できている環境に感謝することが大切だと思う。そして、パヤタスのような生活基盤が不安定な地域で生活する人々の生活水準が向上し、彼らが日々の生活でもっと「幸せ」を感じられるようになることを心から願っている。

「幸せとは何か。」

その定義は人によって全く異なり、自分が幸せだと感じることも誰もがそう感じるとは限らない。しかし、ひとつだけ言えるのは、「幸せ」とは遠くにあるものではなく、日々の生活に溶け込んでいるということである。パヤタスで私は、そんな幸せの見つけ方を教わった。この経験を胸に刻み、これからの日々を大切に生きていきたい。